

魔法の音楽

永吉種広

失意の日々

音楽には傷ついた心を癒す魔法のよ
うな力がある。

そう感じたのは、四十七年間連れ添った妻が、余命半年のがん宣告を受け二年間の自宅療養のあと、亡くなったことがきっかけだった。妻亡きあと、近くに住む多くの家族は足しげく通ってくれた。しかし、妻を無くした喪失感は埋めがたく、日々の生活は色あせ、茫然と生きていた。

そんなある日、友人から、自ら演奏された曲が励ましの言葉を添えて贈られてきた。ベートーヴェンの『ピアノソナタ月光』、ショパンの『ノクターン 遺作』、リストの『愛の夢』など、他数点の作品だった。そのピアノの音色には、心の琴線に響く優しさがあり、魂に寄り添う心地よさと安らぎがあった。音楽がこのように心の奥まで溶け込んで

くる体験は初めてだった。

ベートーヴェンの弟子は『月光』を、「遙か彼方から魂の悲しげな声が聞こえる」といった。私にも苦悩の嘆きが聞こえる思いで、過ぎ去った悪戦苦闘の日々を思い出していった。

忘れ得ぬ書物

人生には、生涯を決定づける、忘れ得ぬ書物に出会うことがある。

それは、価値観や人生観を大きく変え、魂を鼓舞し、生きる力を与えるもので、二十代半ばでめぐり会った。

その頃の私は障害を抱え、日々、自由が利かなくなっていく手足を見つめながら、絶望感に押しつぶされ、生きる気力も失せていた。

そんな折に、『愛の無常について』（亀井勝一郎）やロマン・ロランの『ベートーヴェンの生涯』、『ジャン・クリストフ』（主人公はベートーヴェンがモデル）、『魅せられたる魂』、などに出会い、人生を見開かされた。

絶望とは陣痛

『愛の無常について』の中に、次の言葉がある。

「人間になりかかっている人間だけが絶望する[∴]。つまり自己に絶望

し、自己を否定しながら、第二の自己を形成していく。絶望とは、『生まれ変わる』ための陣痛にほかなりません」

この言葉には言い難い感動を覚え、絶望とは、新しい自分に脱皮し、生まれ変わる希望であると教えられた。

悩みをつき抜けて

「悩みをつき抜けて歓喜にいたれ」

この言葉にはベートーヴェンの生涯が象徴されており、苦悩に挑む人々を励ます響きが聞こえる。

三十二歳で書いた『ハイゲンシュタットの遺書』は、耳の聞こえなくなったベートーヴェンの苦悶と悲しみが伝わり、私は自分の障害に悶々とし日々を重ね合わせ、その絶望的な苦悩に胸をうたれた。

しかし、ベートーヴェンは遺書を書いたが死ねなかった。それは、芸術に対する強い使命感と天命と言える音楽を至高の境地へと押し上げていく強い願望と精神力が自らの命を救った。

このベートーヴェンの苦悩に挑む姿は、私を困難に立ち向かわせる、気力と生き抜く覚悟を与えてくれた。

ロランは苦悩が偉大であるのは、

《苦悩に打ち勝とうと決意し、「…」そ

の苦悩を押し開くときだけ》と述べている。

私も障害で閉ざされた自分の心の扉を押し開き、人としての尊厳を取り戻し、人生の大きな転機となった。

『戦場のピアニスト』

妻と二人で、映画『戦場のピアニスト』(二〇〇三年公開)を見たことがある。映画では、シヨパンの『遺作』が効果的に挿入され、悲しみを湛えた音楽は、深く印象にのこった。

映画の舞台は、第二次世界大戦中ドイツ軍に占領されたシヨパンの故郷ワルシャワ。シヨパンの音楽は愛国心のよりどころとみなされ、演奏することも、聴くことも禁じられていた。

映画は、実在のユダヤ人ピアニストのシュピルマンが飢餓、迫害、死の恐怖に脅かされながらも、ドイツ将校に助けられ生き延びる姿を描く

戦後、ワルシャワのラジオ局が、廃墟の街へ最初に流したのが『遺作』のピアノ曲。復興へ向かう人々の心のもしびとなった。

ドイツでは、リストの『愛の夢』がカフェーの一角から聞こえてくると、多くの人が昔の恋を思い出し、老人が急に生きいきした目になるといふ。

妻との思い出の『遺作』は、私にとっても心の中で、そのような曲に昇華したのかも知れない。

魔法の音楽

友人から贈られた音楽は『ベートーヴェンの生涯』を再読するきっかけとなり、五十数年前の悪戦苦闘した魂の遍歴を振り返る、ほろ苦くも懐かしい日々となった。

音楽は絶望や悲しみの心に寄り添い、ある時は励ましや、勇気を与え、ともに喜びをも分かち合う。そんな音楽の持つ力をあらためて教えてくれた。

私にとって『月光』や『遺作』、『愛の夢』のピアノの音色は、心の悲しみを解きほぐす魔法の音楽でもあった。

ベートーヴェンには時を超え、文学作品と音楽で二度も救われた思いである。

困難に立ち向かい、生きる力を音楽で思い起こさせてくれた妻の友人でもある、K・Kさんに、心から感謝したい。

「漆の実会報 九号」掲載

(二〇二二年四月二十八日発行)